資料２

提　言　書

2023 年 9 月

八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議

目次

１　はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・３

２　アンケート調査・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
（１）「若者意識調査」アンケートの調査概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
（２）アンケート調査からの知見・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４
（３）ジャーニー要素・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７
（４）ジャーニー例：地元就職・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・10

３　提言・・11

政策の柱１　親には経済・子育て支援、子には体験支援・・・・・・・・・・・・12
提言①　自ら企画し、実行する「*＃自修学旅行*」「*＃自分研究*」
提言②　自分でつくるから、自分の街になる。*＃子ども主体のまちづくり*
提言③　タイムリミットは高２！*＃高校生親子の地元・職場・進学体験補助*

政策の柱２　知りたい情報、共感したい想いをデジタルで・・・・・・・・・・・15
提言④　ゲーム感覚で未来を考える。*＃デジタルキャリアノート*
提言⑤　未来の自分が見えてくる*＃夢実現 AI*・*＃夢実現アドバイザー*
提言⑥　VR ゴーグルをかけて、八戸を出る。*＃デジタル国際交流*

政策の柱３　中心街や街並みを再デザインする・・・・・・・・・・・・・・・・・18
提言⑦　「八戸で働く」を現場で体験。中心街を*＃キッザニア八戸*に
提言⑧　集まる楽しさを取り戻す。*＃中心街を図書館・部室・生徒会室*に
提言⑨　汗かく、お金もらう、つながる。*＃中心街バイト自由化*

政策の柱４　大切にする意識をみんなでつくる・・・・・・・・・・・・・・・・21
提言⑩　社会を変える世代をつくる。*＃子どもオンライン政治・行政*
提言⑪　すべての子どもたちに届けるため。*＃あたらしい取組を、学校で*
提言⑫　親子で未来を考える８年を支える基本は、*＃「いま、楽しい」*

―資料編―
委員名簿・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

1　はじめに

八戸市では、市の未来を担う若者や女性にとって魅力あるまちづくりを推進することで、地域社会に活力を生み出し、多様な人材が活躍できる地域社会の形成を図ることを目的に、令和 4 年 4 月に「八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議」（以下、「ネットワーク会議」とする。）を立ち上げました。令和 4 年度は「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」を政策提言のテーマに、「子どもが育つ 18 年間」に、様々な体験を通じて地元のことを知ってもらうことで、地元のことを好きになってもらうきっかけをつくること、また、「子どもを育てる 18 年間」では、経済・子育て支援等を通じて地元で子育てをしたい、子どもにも地元を好きになってもらいたいと思えるようにすることで、この 18 年間というサイクルが好循環となるような 20 の提言をいたしました。

この 20 の提言の中には、中長期な視点で対応していかなければならないものもあるため、今すぐ全ての提言が実現されることは難しいものと思っておりますが、八戸市の各部署におかれては、提言を踏まえた取組を検討され、今年度から既に多くの取組が実現されていることに対して、大変うれしく感じております。

令和 5 年度は、昨年度の政策提言の方向性を生かしつつ、「わたしが育つ 18 年」である、0 歳から 18 歳までの期間に絞って議論してきました。特に小学校高学年から高校生までの 8 年間は、徐々に自分で何でも出来るようになり、親から離れ自立していく年代であるとともに、様々な体験を通して、地元のことや将来のことなどを知り、考える大事な期間であるとの考えのもと、この年代にフォーカスした提言とすることとし、6 回の会議を通して、委員同士の意見交換やグループワークなど活発な議論を重ねてきました。

また、市内の小・中・高等学校のご協力をいただき、市内小学校 4 校の 5・6 年生、市内中・高校生の全生徒と、その保護者、約 29,000 人を対象とした大規模なアンケート調査を実施し、そこから得られたデータやニーズを把握することで、より実効性のある提言内容を検討することができました。

約半年間という限られた時間の中での議論ではありましたが、私たちのまちが今よりも魅力的なまちになっていく仕組みづくりに向けて、これまで培ってきた知見や人的ネットワーク等を活用しながら、政策提言としてまとめあげました。

八戸市の明るい将来の実現には、若者や女性が住み続けたいと思えるまちづくりが大変重要です。私たちの提言が、ひとつでも多く市の施策として取り入れられ、八戸で過ごす 8 年間が子どもたちにとって明るい未来につながっていくことを切に願い、次のとおり提言いたします。

２　アンケート調査

（１）「若者意識調査」アンケートの調査概要

〇調査地域：八戸市内
〇調査対象者
・小学生とその保護者・・・市内４校を選定し、5・6年生を対象
・中学生とその保護者・・・市内中学校26校の全生徒を対象
・高校生とその保護者・・・市内高等学校17校の全生徒を対象
〇調査方法
・各小・中・高校を通じ、生徒にアンケート調査票を配付し、Googleフォームによるオンライン回答を依頼。
・保護者の方には、児童・生徒を通じて、アンケート調査票を自宅に持ち帰っていただき、Googleフォームによるオンライン回答を依頼。
〇調査期間：令和5年6月16日～7月3日

【回答状況】

対象者	配付数	回答数	回答率
小中高校生	14,370	5,787	40.3%
保護者	14,370(※)	1,497	10.4%
合計	28,740	7,284	25.3%

（※）保護者の配付数は、小中高生の配付数と同数としている。

（２）アンケート調査からの知見

【8年間共通・子ども編】
〇八戸市への愛着・理解度は、小学生から高校生になるにつれて経年的に下がり続ける。
〇八戸市に愛着や親しみを感じていない人は、東北内、東京圏への居住希望傾向がある。
〇子が感じる親の愛情は、ほぼ全世代でほぼ90%近くが「ふつう」以上と非常に高い。
〇学校の楽しさ・未来の明るさについて、いずれも「兄弟あり」のほうが高く、「運動部」が高い。
〇八戸市内に住みたいと思っている人は、愛着や親しみを感じている人が多く、「就職」を希望している人が多い。

〇将来どのような人生を送りたいかについて、

→「自分の好きなことや専門性を活かした仕事を続ける」が全学年1位で、2位は「安定」と「趣味」が拮抗している。

→「自分の好きなことや専門性を活かした仕事を続ける」は、女性に比べて男性が13.4%少ない。一方、「趣味が充実した生活を送る」は、女性に比べて多い。男性は自分の好きなことと仕事をつなげて考えない傾向が強いと考えられる。

〇将来の希望居住地について、

→「八戸」「青森」を希望する人は、兄弟なしの方が多い。1人っ子の方が家族と一緒にいたい傾向が強い。

→学年が上がるほど「八戸」の割合が減っていき、男性より女性のほうが市外への居住希望割合が高い。

→「海外」を選択した人は、将来人生として、「起業してビジネスを成功させる」を希望する人が多い。

〇将来の希望職業について、

→「国家公務員・地方公務員」は中学3年生・高校3年生で増える。

→「情報通信業」を希望する割合が、男性は高いが女性は低い。

→「建設業や製造業等の第2次産業」を選択した人は、高校卒業後に「就職・就業」を希望する人が多い。

→「教育・学習支援業」を選択した人は、高校卒業後に「短大進学」を希望する人が多い。

〇親によく遊びに連れて行ってもらうところは、「市内商業施設」「市街商業施設」が大半。娯楽施設・公園は減少していく。飲食店は増加していく。市内観光施設（蕪島・種差海岸・マリエントなど）は特に低い。（中でも高校生は特に低い）。

〇八戸の誇りについて、

→男性は、「国宝」「スポーツチーム」「産業都市」「まちの大きさ」が多い。他都市と比較した時の客観的な価値を認める傾向がある。

→女性は、「祭り」「中心街」「飲食」などが多い。地元での身近な暮らしに価値を認める傾向がある。

〇将来についての情報源について、

→「親」が圧倒的に多い。なお、全学年において、親族（「祖父母」「親」「兄弟」「親戚」）を選択した割合が、学校関係（「先生」「同級生」「先輩・後輩」）の割合よりも大きい。

→「親」「兄弟」「祖父母」は、中学生以降、下がり続ける。

→「先生」は、中学1年生から高校3年生まで上がり続ける。先生と何を話すかで学生の将来に影響する可能性がある。

〇将来についての情報源（メディア）について、

→インターネット・SNSが圧倒的に多い。テレビ・ラジオの割合の2倍以上、市広報誌・新聞・本雑誌の4倍以上。

→男性は、テレビが多く、女性はSNSが多い。

→インターネットは、小学5年生でも7割、中学生では85%を超える。

→SNS使用は、高校1年生まで上がり続け、75%をキープ。

〇地元についての情報源について、
　→親が圧倒的に多い。次に祖父母が多い。
　→「先生」は、中学生をピークに減少する。
〇地元についての情報源（メディア）について、テレビとインターネット・SNSの2本柱。
　SNSは伸び続け、高校からは5割を超える。

【8年間共通・親編】
〇八戸市に愛着や親しみを感じている親は、「東京圏で就職してほしい」と思う割合が低い。
〇子どもへの導きの程度について、
　→「ある程度導くべき」が大半だが、経年的に少しずつ減少する傾向。
　→「導くべき」と思っている親でも、高校卒業後の進路については、「本人に任せている」と回答した人が多い。
〇子どもへの愛情について、「注げている」が大半で（平均80.5%）、「注げていない」も経年的に減少する傾向。
〇子どもの将来の人生希望について、
　→「自分の好きなことや専門性を活かした仕事を続ける」が、全学年で圧倒的な1位。
　→「仕事より家庭を優先した生活を送る」を希望している親は、「市内に進学してほしい」と思っている人が多い。
〇子どもの高校卒業後の進路について、「本人に任せる」が圧倒的に多い。
〇高校卒業後の進学希望と、就職先については、ある程度同じ回答を選択している傾向がある。
〇子どもの就職希望先について、「本人に任せる」が圧倒的に多い。
〇子どもへの必要な体験について、
　→「職場体験」が多く、次に「外国人との交流体験」「学力向上」。
　→「農作業」「自然」「親子参加」が減り続けるが、高校3年生で少し持ち直す。
　→「職場体験」「公共・民間施設の見学」が、高校3年生で大きく減る。一方、「外国人」は持ち直す。
　→「農作業や収穫体験」と回答した親は、将来希望として、「仕事より家庭を優先した生活を送る」を希望している人が多い。
〇子どもとの体験頻度は、経年的に下がり続ける。
〇子どもと話す機会は、女性の子の方が多い。
〇地元の情報源について、親世代でも「親」が最多。
〇地元の情報源（メディア）について、
　→インターネット＋SNSがテレビを上回る。親世代でもインターネットが優勢。
　→新聞・市広報誌を足すとインターネットやテレビ単体の割合を上回る。

（３）ジャーニー要素（各学年における行動や思考、感情などを可視化したもの）

【小学生】

【子ども・小５】

・学校生活や暮らしの楽しさが最大（「楽しい」以上が83.0%）。
・未来の明るさを感じていない割合が最小（「あまり感じていない」以下の合計が5.4%）。
・親の愛情を感じていない割合が最小（「あまり感じていない」以下の合計が4.2%）
・高校卒業後の進路「まだ考えていない」が最大（53.3%）
・希望職業「スポーツ関連業」が最大（22.5%）。
・起業を志望する割合が最大（3.3%）。

【親・小５】

・会話の頻度が最小（「月に1回以上」以上が52.7%）
・愛情、「注げている」以上が大半（76.4%）だが、「まったく愛情を注げていないと感じる」が最大（1.8%）
・地元についての情報源、「SNS」が最大（41.8%）だが、高校3年までの間に30%程度まで減少。

【子ども・小６】

・将来についての情報源（メディア）、「テレビ」が最大（76.1%）。この傾向は中2まで続く。
・八戸への親しみが最大（「感じている」以上の合計が87.7%）。
・親に遊びにつれていってもらう場所、「娯楽施設」が最大（39.0%）だが、その後高校3年までの間に12%程度まで減少。
・自分で遊びに行く場所、「友達の家」が最大（62.5%）。

【親・小６】

・子どもとの体験頻度が最大（「月に1回程度」以上が41.2%）。
・キャンプなどの自然と触れ合う体験が子に必要と考える親が最大（38.2%）
・子どもの八戸居住要件、「雇用確保」が小5から小6で大きく上がる（+15.1%）。中学進学が近づくタイミングで、八戸の雇用を気にしだす傾向。
・八戸への理解度、「よく知っている」が小5→小6で大きく減る（7.3%→1.5%）。地域の教育の状況について気にしだすが情報が足りていない傾向。
・地元についての情報源、「子ども」が最大（38.8%）。
・地元についての情報源、「市広報誌」が最大（41.2%）。
・学力向上のための授業・講義・セミナー等の体験が子に必要と考える親が最小（25.0%）

【中学生】

【子ども・中１】
・八戸への興味が薄れ、将来の居住地について東北を希望する割合が大きく増える（13.9%→21.6%）。運動部に入り、スマホも手に入れ、広くなった世界を楽しんでいる可能性も。
・徐々に公園に行かなくなる。
・未来の明るさが少し下がる。中学や多感な時期の厳しさが影響か。

【親・中１】
・子どもとの体験頻度が大きく下がる。「上記（1年に1回程度）より頻度は少ない」が倍増する（7.4%→18.6%）。
・地元についての情報源、子から情報を得ることが大きく減る（38.8%→23.4%）。

【子ども・中２】
・娯楽施設ではなく商業施設に行くようになる。

【親・中２】
・子を娯楽施設に連れて行く必要性が減り、八戸への娯楽施設のリクエストも減る。
・子どもの未来のために必要な体験、「外国人との交流体験」が高水準(48.4%）。

【子ども・中３】
・遊びで飲食店に行く割合が2割を超える。
・未来の明るさが少し下がる。受験が影響か。
・起業を志望する割合が高水準（2.8%）自由に未来を思い描いている傾向。

【親・中３】
・子どもと話す機会が1回目のピーク（「月に1回以上」79.4%）。なお、2回目は高校3年。
・子どもの高校卒業後の進路「八戸市内に進学してほしい」最大（26.3%）。
・八戸への親しみがピーク（「親しみを感じている」（72.6%））。親子で八戸を一通り楽しみ尽くしているか。

【高校生】

【子ども・高１】
・八戸への愛着が減る。
・遊びに中心街に行く割合が2割を超える。
・就職希望「教育・学習支援」が、高1に一気に増える（4.0%→8.4%）。高校の教育を評価し、憧れが強くなる傾向。
・将来についての情報源「先輩・後輩」が２割を超え、高校3年間続く。

【親・高１】
・子から地元についての情報を得ることが減る。
・子どもの将来希望、「安定した会社で、長く堅実に働く」が大きく下がる(-10.5%)。対照的に「好きなことや専門性を生かした仕事」が大きく上がる（+11.5%）。高校入学で専門性がハッキリしてきたので、「安定した会社で」のような抽象的な回答が減っている傾向。

【親・高１】
・子どもの高校卒業後の進路「八戸市内に進学してほしい」が大きく減る(-19.6%)。代わりに「八戸市外に進学してほしい」が大きく増え（+7.1%）、「本人に任せる」も増える（+6.8%）。親は小・中学にいるまでの間は、そもそも市内の高等教育機関のことを知らない可能性もある。
・子どもの未来のために必要な体験、「職場体験」が最大（74.1%）。

【子ども・高２】
・将来の居住地について東北を希望する割合が最大（35.9%）。一方「東京」はそれほど増えない（24.4%→24.0%）。八戸は出たいが、東京には行けないと思っている学生が多いか。
・将来についての情報源「親」が8割を切り、逆に「先生」が6割を超える。

【親・高２】
・子どもとの体験頻度「月に1回以上」が最低（23.4%）。

【子ども・高３】
・未来の明るさが少し下がる。
・将来の人生希望、「自分の好きな事や専門性を生かした仕事」が大きく下がり（36.7%→30.2%）、「趣味が充実した生活」が大きく上がる（20.5%→25.8%）。仕事で自己実現する欲求が減少傾向。
・影響力がある人、「先生」が最大(7.1%)。進路においても、教員の導きが重要。
・就職を考える生徒が大きく増える（16.8%→28.3%）。逆に「大学進学（場所未定）」の意向が大きく減る（15.1%→5.9%）。場所未定で大学進学を考えている学生は、結果的に就職に流れる傾向。
・就職希望「建設業等の第2次産業」が急激に増える（5.4%→11.9%）。それまで建設を意識していない人が6%近くいることになる。高3ではじめて就職を意識した時「第2次産業」が選ばれる傾向。

【親・高３】
・子どもの将来希望、「自分の好きな事や専門性を生かした仕事」が最低(58.4%)。
・子どもが八戸に住みたいと思うために必要なこと、「友人や知人、家族や親族が身近にいること」が大きく下がる（23.5%→16.2%）。
・子どもとの体験頻度、「１年に1回程度」以下の割合が最大（28.9%）。
・子どもとの会話頻度、「毎週程度」最大（37.0%）。
・子どもへの愛情、「十分に注げていると感じている」が最大（27.7%）。
・子どもの未来のために必要な体験、「外国人との交流体験」が最大（49.7%）。
・地元についての情報源、「親」が最低（36.1%）、「友達」が最低（37.9%）、「地域の人」が最高（45.0%）、「兄弟・姉妹」が最高（15.4%）。
・地元についての情報源（メディア）、「新聞」が最大（44.5%）。

（４）ジャーニー例：地元就職

小学5年生頃までは、親子で地元の暮らしを楽しんでいるものの、小学6年生頃になると、先に親の方が子の働く未来を気にし始める。しかしながら、親たちは地元に関する情報や理解が十分ではないため、不安を感じ始める。

中学校に入った子どもは、主に運動部で活躍しながら楽しい中学時代を過ごすが、親とは次第に距離を取り始めるとともに、八戸への興味は薄れ、テレビよりもインターネット・SNSに触れる時間が長くなる。起業についてなど、大きな夢を抱くこともある。

中学生の親は、自分ひとりで好きなことを見つけ、自分ひとりで楽しく暮らす子どもを見守り、愛情を注ぐ。一方、見守る姿勢が強くなり、子を遊びに連れていくことが減っていく。子のやりたいことをさせてあげたいと思っており、地元進学・地元就職についてのこだわりも大きくないが、少しは導いてあげたいと思っている。

高校受験のタイミングでちょっと緊張感が生まれるが、なんとか高校入学。親子ともにちょっと楽観的になる。

運動部で楽しくすごす高校2年生までの間、中学校入学後と同様に八戸への興味は薄れ続け、インターネット・SNSに触れる時間がさらに増え、親とのお出かけも少なくなる。地元への興味が薄れるのと対照的に、具体的な進路のイメージは無いものの「仙台あたりに」、「東京に」といった将来の居住地のイメージを持ち始める。

小学6年生から高校2年生までは、将来を大きく左右する大学受験まで、まだ余裕があるためか、親子ともにリアリティに欠けたままである。

高校生の親は、就職・進学が近づいてくるにつれ、将来的に子が安定した職場で働けることを望むようになり、県外進学を意識し始めるが、子を導くというよりも、あくまで見守る姿勢で接する。親子での体験なども減っていき、子に進学をすすめることもしない。

一方、子も当初はぼんやりと大学進学を考えているが、大学の場所すらイメージがついていない場合があるなど、曖昧なイメージで、そのまま高校2年生まで過ごしてしまう。

地元就職について真剣に考えるのは高校3年生になってから。おそらくは現実問題としての学力面と親の金銭的援助の壁によると思われる。

子は教師とのコミュニケーションを通し、当初は意識していなかった業界への就職をイメージし始める。

親は地元就職については情報が乏しく、親に加え親族・地域の人などから情報を得ているが、その情報は十分とは言えず、もともと子を導くべきではないという思いもあいまって、明確な結論は出ない。中学・高校と、親は子への愛情を注いでいるし、会話もしているが、進学先や就職先などの情報が足りない。

やがて、子が教師と相談しながら考えた進路を親は聞き、子の意見を尊重する。子の意見と先生の意見が混濁している。

子はやがて、（なかば消極的に）地元に就職する。この頃には、地元への愛着はすっかり薄れている。

3　提　言

■ 令和５年度政策提言のテーマ

アンケート結果を基に考察した、「地元就職」に関するジャーニー例は、調査結果から見える 1 つの仮設であり、全ての人があてはまる訳ではありませんが、小学生から高校生になるにつれて八戸市への愛着や親しみの度合が減っていくことは、この辺りの要因もあるかもしれません。

中学生や高校生年代は、1 人で何でも出来るようになり、結構放置されがちで、親も勝手に距離を置いている部分もありますが、むしろ、この年代に親や地域、学校が積極的に関わりを持つことによって、子どもたちが将来に向けて歩みを進めていく中で、サバイブ（生き抜く）力を育む大切な期間となることでしょう。

小学校 5 年生から高校 3 年生までの 8 年間において、単純に楽しく過ごした実感があれば、きっと八戸を好きになる子どもたちが増えていくはずです。そのような思いから、この 8 年間における親子に対して、心を動かせる政策を提言いたします。

☆令和５年度政策提言のテーマ☆

「将来を夢見る8年間が、わたしの翼になる」

政策の柱１　「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」のため、親には経済・子育て支援、子には体験支援

～親から自立していく時期、未来の可能性を模索できる時期である中 1～高 2 に体験を集中投下～

【提言①】 自ら企画し、実行する「*#自修学旅行*」「*#自分研究*」

【提言②】 自分でつくるから、自分の街になる。*#子ども主体のまちづくり*

【提言③】 タイムリミットは高２！*#高校生親子の地元・職場・進学体験補助*

対象	小５	小６	中１	中２	中３	高１	高２	高３	指針
提言①			○	○	○	○	○		
提言②			○	○	○	○			
提言③						○	○		

【提言①】 自ら企画し、実行する「*#自修学旅行*」「*#自分研究*」

【課題】

かつて、子どもたちにとって、修学旅行は極めて重要な意味を持つイベントでした。学校の一行事にとどまらず、人生の意味すら変えるほどのインパクト。

しかし、比較的豊かになった現代、特に個々の専門性や個性、自主性やコミュニケーション能力の重要性が叫ばれる現代にあって、全員が同じカリキュラムをこなす修学旅行は若干の時代遅れ感があることも否めません。

現代の子どもに必要な、新しい修学旅行のかたちとは、どのようなものでしょうか？

【展望】

新しい修学旅行の形として求められるのは、専門性・個性を活かす内容と、自主性やコミュニケーション能力が求められる体験のデザインです。

シンプルに言えば、自分のリスクで自分の行きたい場所に行くという体験こそ、子どもたちの成長に有益です。

自習する、自ら学びを修める旅。そんなニュアンスをかたちにできたら、その旅は「自修学旅行」とでも呼べそうです。夏休みにやれば、自由研究ならぬ「自分研究」ですね。

【施策例】
1．「自修学旅行」「自分研究」のような自発的な旅の企画・実行を教育プログラムとしてとりまとめて実施
2．中心街などで報告イベントを実施し、情報を他学生・親・教員とシェア
・「八戸にも、こんな子がいる」
・審査・投票などで選ばれた優秀報告をもとに、地域の大人・教師等が旅をなぞり、大人から学生を理解する態度を示す
3．圏域へのホームステイを推進・補助

【提言②】 自分でつくるから、自分の街になる。*#子ども主体のまちづくり*

【課題】
アンケート調査結果では、小学５年生から高校３年生になるにつれて、地元への愛着度は下がり続けています。八戸が魅力的な街であり続けるためには、子どもたちが八戸への愛着をなくしていく様子を指を加えて見ているわけにもいきません。
確かに八戸は一地方都市であり、すべてが揃っているわけではありませんし、不便な点もあります。
ならば八戸は、子どもたちに愛着を持ってもらうことはできない…あきらめるしかないのでしょうか？

【展望】
２つのアプローチが有効であると考えます。
一つ目は、人。アンケート調査結果では、八戸への愛着とともに経年的に低下する指標の一つに、「人の魅力」に対する誇りの度合いがあります。八戸には魅力的な人がたくさんいるはず。そのため可視化するだけできっと指標は上向き、ひいては八戸への愛着までつながっていくはずです。
二つ目は、社会参加。学生たちのため、親子のために役立つのなら、公共施設や社会インフラすら子どもたちのための実験台にしてしまえばいいのです。

【施策例】
1．公共施設に設置する「子どもをほめる・励ます匿名掲示板」
・子どもの悩みと、大人からの回答・応援を掲示
・アナログでは七夕の短冊のような、デジタルではデジタルサイネージのような形
・広報はちのへとの連動企画も
2．美術館・マチニワ・はっちなどを学校や子ども主体の組織へ開放する「一日子ども館長」
3．学生目線で公共交通機関を見直す「毎日乗っている子どもたちに聞いてみよう」

【提言③】 タイムリミットは高２！*#高校生親子の地元・職場・進学体験補助*

【課題】

大規模なアンケート調査の結果で見えてきたのは、ギリギリまでキャリアのイメージを確立できず、なし崩し的に就職してしまう高校３年生。

「大学には行きたいが、場所はイメージできていない」「就職したいが、業種はイメージできていない」。この状態から親子で脱却しなければなりません。遅くとも、高校２年生までに。高校３年生になって流されるように就職したのでは、地元への愛着も、就職先・進学先への愛着も、生まれませんから。

【展望】

２つのアプローチが必要だと考えます。

まず一つ目は、高校生親子が地元の特色ある観光施設や産業に触れる機会を増やすアプローチ。たとえば八戸に住民票を移した人は八戸の公共施設のクーポンがもらえます。八戸への興味が下がっている高校生親子にも、同様のアプローチによって地元理解を深めます。

二つ目に、高校生親子が就職・進学について理解を深める機会を増やすアプローチ。「なんとなく〇〇地方に暮らしたい」「なんとなく就職・進学したい」…そんなあいまいなイメージを払拭するための体験を、高校生親子に提供します。

【施策例】

１．高校生親子向け観光地クーポンの導入
　・デジタルキャリアノート（後述）と絡め、親子で会話するきっかけとなる仕掛け
　・地域に精通した「地域マイスター」による親子の体験のサポート
２．高校生親子向け職場体験・合同企業説明会・インターン説明会の開催
３．高校生親子向け進学説明会・大学見学補助の実施
　・地元を離れ、親子で話すきっかけに

政策の柱２　「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」の
知りたい情報、共感したい想いをデジタルで

～デジタルネイティブの子どもと親にふさわしい UX を提供し、キャリア教育の DX を実現～

※UX…User Experience ユーザーが商品やサービスを通じて得られる体験のこと

【提言④】 ゲーム感覚で未来を考える。*#デジタルキャリアノート*

【提言⑤】 未来の自分が見えてくる*#夢実現 AI*・*#夢実現アドバイザー*

【提言⑥】 VR ゴーグルをかけて、八戸を出る。*#デジタル国際交流*

対象	小５	小６	中１	中２	中３	高１	高２	高３	指針
提言④	○	○	○	○	○	○	○	○	
提言⑤		○			○		○		
提言⑥				○	○	○	○	○	

【提言④】 ゲーム感覚で未来を考える。*#デジタルキャリアノート*

【課題】

子どもは生徒・学生の間、何度も何度も将来について訊ねられます。しかし、これだけでは考えをまとめることは至難の業です。日々浮かぶイメージを記録し、つなげ、物語を形作るような何かが必要です。

一方で、親側にも困難な問題があります。そもそもかなりの数の親たちは、地元にある就職先・進学先の情報が不十分である場合が多く、日本の教育システムや無数にある就職先・進学先の情報となれば、なおさらです。

キャリアについて親子で考えるためには、上記２点の問題の解決が必須です。

【展望】

子どもがキャリアについて活動した記録や抱いたイメージを記録しておけるサービス、名付けて「デジタルキャリアノート」。主な機能は記録です。

地域・就職・進学などキャリアに関わる内容のリストから興味が湧くものを選び、調べ、ポケモンのようにコレクションしていく…そんな体験も、デジタルなら提供できそうです。

子どものみならず、親にも参考になる「八戸の教育まるわかりコンテンツ」を準備できれば、突発的な子育ての不安にも応えられます。

親子で未来を考える８年間を見守り、サポートするサービスです。

【施策例】
1．小中高一貫でキャリアに関する日々の活動を記録するスクラップブックの開発
　・紙だと捨てられるものも、デジタルなら残せる
2．地域・就職・進学のリストをゲーム感覚でコンプリートしていくUXデザインの導入
　・子が自分の興味を可視化し、親に伝えることができる
3．親子で勉強になる「八戸の教育まるわかりコンテンツ」の開発
　・教育システム・進学就職状況・学資金のお話・行政のサポート・先輩の話など

【提言⑤】 未来の自分が見えてくる *#夢実現AI・#夢実現アドバイザー*

【課題】
　デジタルキャリアノートによって集まるビッグデータを放っておくわけにはいきません。
　一方で、放っておくわけにはいかないのは、親や先生も同じこと。データから見えることは何か、具体的にどんなアドバイスをすべきなのか？
　デジタルキャリアノートが記録サービスとして学生たちに利用されるようになるのみならず、未来像の提示や、指導する側のサポートまで拡張するには、どんな機能が必要でしょうか？

【展望】
　AIによる学習・分析は道筋として見えています。いかんせんテーマは子どもの未来ですから、AIだけを盲信するのも難しいものがあります。
　共感できる語り口で、学生や親・先生にキャリアプランニングを説く人が必要です。いわば、夢実現アドバイザーです。
　デジタルもアナログも駆使して、親子に未来を考える機会を提供します。

【施策例】
1．デジタルキャリアノートの内容を分析・学習する夢実現AIの開発
2．AIと協調して未来を語る夢実現アドバイザー
　・キャリア支援の経験を伝える、ITのバックグラウンドとして活用
3．夢実現アドバイザーによる八戸のキャリア支援についてのメディアを活用
　（Youtube・ラジオ等）

【提言⑥】 VR ゴーグルをかけて、八戸を出る。*#デジタル国際交流*

【課題】

子どもの未来のために必要な体験は？ アンケート調査の結果、８年間の全世代で不動の１位は「職場体験」でした。そして第２位は、こちらも不動で、全世代で５割弱が回答した「外国人との交流体験」。特に第２位の結果は、まちの魅力創生ネットワーク会議委員の皆さんも驚きました。

これほどの親御さんが外国人との交流体験を求めているのに、いま八戸の学生はどれほどの機会があるでしょうか？

【展望】

ITの発達により、東京や仙台に物理的に移動するよりも、インターネット経由で外国に行く方がはるかに簡単になるという逆転現象が起きました。新型コロナウィルス感染症の結果として、オンライン会議が市民権を得ました。いよいよVR・ARが広がりを見せつつあります。

…まさしくデジタルにぴったりの案件です。

ただし、もう２点、必要なことがあります。国際交流する相手のアレンジと、ITツールのサポートです。もし学校で実施する場合も、学校に負担をかけない制度とオペレーションの設計が求められます。

【施策例】

１．VR・AR・メタバースなどのIT技術を活用したリアルタイム国際交流の実施
２．マチニワのスクリーンなど、公共スペースを生かした国際交流イベントの開催
３．国際交流の相手さがし・IT 技術などをサポートする組織への補助

政策の柱３　「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」にあわせて、中心街や街並みを再デザインする

～資源を中心街に集中し、中心街を教育や親子の成長のための場所として再デザイン～

【提言⑦】　「八戸で働く」を現場で体験。中心街を *#キッザニア八戸*に

【提言⑧】　集まる楽しさを取り戻す。*#中心街を図書館・部室・生徒会室*に

【提言⑨】　汗かく、お金もらう、つながる。*#中心街バイト自由化*

対象	小５	小６	中１	中２	中３	高１	高２	高３	指針
提言⑦	○	○							
提言⑧			○	○	○	○	○		
提言⑨						○	○	○	

【提言⑦】　「八戸で働く」を現場で体験。中心街を *#キッザニア八戸*に

【課題】

小学生の親子は、海に山にと遊びに出かけ、貴重な体験を積み重ねています。しかし、親子でのお出かけは中学生以降、急激に減っていきます。思春期における親子の距離が遠くなるのは、生き物として仕方ないところもあるのでしょう。

いや、「仕方ない」では済ますことができない問題があります。

自然とのふれあいや娯楽施設でのさまざまな体験は、小学生の親子は十二分に体験しています。しかし、職業体験について見ると、小学生には早すぎるのか、環境が十分整っているとは言えないようです。また、中学生になると、親子での体験自体が減ってしまいます。親子での行動が多い小学生時代に親子での職業体験をしてもらうのが理想です。どうすれば実現できるでしょうか？

【展望】

インターネットが発達した現代にあって、実は地方と都会の格差は狭まりつつあります。ネットショッピングで何でも買うことができれば、SNS経由でさまざまな価値観を知ることも可能です。しかし、職業体験の環境でどうしても都会に敵わないところがあります。

それは、キッザニアの存在です。悔しい。八戸にキッザニアは無い。

…ならば、作ってしまえばいいのでは？八戸にはお店や産業が集まった中心街がありますから、きっとできるはずです。

【施策例】
１．中心街をキッザニア化
　　・実際の商売の現場を子どもに体験させることで、キッザニアを超える
２．朝市のように「キッザニアが立つ」
　　・地域の産業のブースを中心街に並べた歩行者天国
３．子から親へお店の情報を伝えることで、中心街活性化にもつながる

【提言⑧】 集まる楽しさを取り戻す。*＃中心街を図書館・部室・生徒会室*に

【課題】
　いま、学校での部活やクラブ活動といった課外活動が減っています。
　放課後はたいてい部活か、誰かの家に集まるかだったものです。しかし現代は課外活動が減っていますし、友人を家に呼ぶことを禁止する家もめっきり増えました。
　結果として、子どもたちは集まって何かをする体験が激減しました。勉強はひとり、課外活動にも参加せず、ひとりスマホをのぞいている。こんな暮らしをしていたら、きっと八戸のことなんて好きにはならないでしょう。
　集まることは、楽しいこと。ならば、どこに集まればいいのでしょう？

【展望】
　ヒントは中心街の日常の中にありました。
　バス・電車の乗り換えのため、中心街には一定の学生が集まります。すると、学生が学生を呼び、放課後にはっちやマチニワ、美術館で勉強をする学生が目につくようになりました。
　子供たちは、中心街で集まって有意義に過ごす方法をすでに教えてくれていたんです。
　ならば、この子どもたちの知恵を拝借しましょう。勉強のみならず、課外活動にもまちづくりにも、応用できるはずです。

【施策例】
１．中心街を勉強のために集まる図書館に
　　・事前登録した「家庭教師」によるサポート
２．中心街を部室に
　　・IT系・サブカルチャー系の学生を集め、創造性を育てる
３．中心街を学生のまちづくりの活動拠点になる生徒会室に
　　・学生が自治・運営する組織。こどもの国ならぬ「こどもの街」

【提言⑨】 汗かく、お金もらう、つながる。*#中心街バイト自由化*

【課題】

アンケート調査結果から、子どもが持っている情報は、親と教師から知ったものが大半を占めています。親についてもう一歩踏み込んでみると、その親の情報源も親だったりします。情報は親から子へと縦に伝わってばかりのようです。

一方、教師は教師で日々の仕事に忙殺されていて、広く世間のリアルタイムの情報を得る機会に乏しく、情報のアップデートには多大な自助努力が求められます。

すなわち、親や教師の持っている情報は古いことが往々にしてあります。もし子どもたちが、そんな古い情報だけを素材にして未来を考えているとしたら…？恐ろしいですね。

親と教師以外からの情報を子どもに授けるためには、どうすればいいでしょうか？

【展望】

人間として視野が広がる体験のひとつとして、アルバイトが挙げられます。

アルバイトは単に収入を得るという手段のみならず、地域の理解につながり、社会性や金銭感覚が得られ、縁が生まれます。そして、家庭と学校以外の居場所となり、親と教師以外の大人からの情報が得られます。

さらには、自分でお金を稼ぎ自分で生きた実感と、自分で得た情報をもとに未来を思い描く意識と、大切な思い出が得られます。これほどの体験支援があるでしょうか？

問題は、高校生を安全にアルバイトさせることであり、学業や課外活動と両立させること。八戸ならではのアルバイト制度を作り、八戸での有意義な高校生活をプレゼントしましょう。

【施策例】

1．中心街などの特定エリアと協力した地区限定・時期限定でのアルバイト解禁
　・教育機関・事業者が連携し、高校生に安全なアルバイトを提供
2．中心街の事業者が同日・一斉にアルバイトの説明会・面接会を実施する「バイトまつり」の開催
3．草取り・雪かきなどの超短時間アルバイト「猫の手バイト」の実施

政策の柱４　「わたしが育ち、わたしが育てる 18 年」を大切にする意識をみんなでつくる

～八戸市が「親子のための自治体」となるための 10 個の施策と 2 個の指針～

【提言⑩】 社会を変える世代をつくる。*#子どもオンライン政治・行政*

【提言⑪】 すべての子どもたちに届けるため。*#あたらしい取組を、学校で*

【提言⑫】 親子で未来を考える 8 年を支える基本は、*#「いま、楽しい」*

対象	小５	小６	中１	中２	中３	高１	高２	高３	指針
提言⑩						○	○	○	
提言⑪									○
提言⑫									○

【提言⑩】 社会を変える世代をつくる。*#子どもオンライン政治・行政*

【課題】

子どもは素直です。もしこの社会におかしなことがあったら、社会の問題を指摘し、社会を変えようとします。しかし、子どもは社会の有り様を知りません。

政治と行政は何が違うか。どこまで行政が担うべきであり、どこからが自治なのか。どんな税金を払う義務を負っていて、どんな権利や自由を持っているのか。地元はなぜ、こんな姿をしているのか。本当は変えられるはずなのに、どうして変わらないのか。どうすれば、変えられるか。

子どもたちに八戸の社会を変えてもらうための最短ルートは、どんなものでしょう？

【展望】

子どもたちに社会の有り様を伝え、社会の変え方を伝えることができれば、子どもたちが大人になった頃、きっと八戸の社会を変えてくれることでしょう。１世代分の年月＝数十年で変えられるなら、安いものです。

その原動力は、デジタルです。

今の社会は、デジタルがなかった頃に形作られたものです。そんな古い社会の形に後からデジタルを適用するのではなく、デジタル前提の社会のかたちを考えることを、昨今ではDX（Digital Transformation）と呼びます。

政治・行政と市民の関わりを、子どもの世代からDXしましょう。

【施策例】
1．オンライン模擬投票の実施
　・GIGAスクール構想で配布されている端末を用い、子どもの民意を示す
2．八戸市議会オンライン配信を教育コンテンツとしての活用
　・政治・行政の論点や政治家の在り方を子どもに説明
3．子どもにもわかる総合計画の策定

【提言⑪】 すべての子どもたちに届けるため。*#あたらしい取組を、学校で*

【課題】
　未来を考える親子をサポートする施策について、すでに八戸は無数にトライしています。しかし、様々な課題や問題があって、一部にしか届いていないことがアンケート等から分かります。
　イベント形式の場合、どうしても消極的になってしまう一定の層が存在するという問題です。多忙さ、金銭的制約、心理的制約などを理由に、イベントタイプであるだけで離れていってしまう市民は、決して少なくありません。
　どうすれば、あまねく親子みんなをサポートすることができるでしょうか？

【展望】
　この問題を解決する方法は明らかです。すなわち、施策群を小中高校の授業に組み込むことです。力技になってしまいますが、授業への組み込みを強く提言いたします。
　しかし、働き方改革の真っ只中にある教育現場において、教員の負荷を上げることはできません。とはいえやはり、学校でなければ市民全員にサービスを届けることはできません。
　そこで必要となるのが、学校以外の教育団体です。

【指針】
1．小中高校における選択授業の確保
2．選択授業を外部教育団体に委託しやすいシステムの構築
3．未来を考える親子をサポートする市の事業を受託するNPO・高等教育機関等の団体による活動推進
　・第一次産業・伝統芸能・地域文化など、体験支援となるコンテンツを持っている団体の巻き込み
　・高等教育機関の巻き込み

【提言⑫】 親子で未来を考える８年を支える基本は、*#「いま、楽しい」*

【課題】

親子で未来を考える８年を考えると、どうしても教育的見地からの話が多くなります。

しかしアンケート調査結果が暗黙的に示しているのは、小５から高３までの子どもの成長にあわせて、懸命に親子で楽しもうとしている姿。

良いこと、正しいこと、役に立つこと…そんな施策ばかりでは、親子にそっぽをむかれてしまうのではないでしょうか？

【展望】

ここはひとつ、意を決しましょう。

親子は、いま楽しいことしかしないんです。子どもは心の赴くままに楽しいほうへ走り出すし、親は子が走り出す様子を見て幸せを感じます。

この項目は、具体的な施策の提言ではありません。楽しくなければ親子の８年を支えることはできないという当たり前の事実の確認であり、すべての施策に共通する基本的方針を掲げようという宣言です。

子どもたちは未来に希望を膨らませ、キラキラしています。そのキラキラを損なわないためにも、楽しませなければ。

【指針】

１．「楽しい」を無視しない事業設計の推進
２．「楽しい」を実施できる組織の育成
３．たとえ地方自治体による公の事業であろうとも、ユーザを楽しませるデザイン・演出・仕掛けに対して臆することなくお金をかける

八戸市まちの魅力創生ネットワーク会議　委員名簿

（任期：令和４年４月～令和６年３月）
※令和５年４月～令和６年３月

敬称略：五十音順

	氏　　名	備　　考
1	秋田　音々香	公募
2	井上　丹	八戸学院大学　講師
3	（副会長） 川守田　礼子	八戸工業大学　准教授
4	坂本　俊也 ※	八戸青年会議所　理事長
5	下總　由衣 ※	青い森信用金庫　地域支援室
6	（会長） 玉樹　真一郎	NPO 法人プラットフォームあおもり　副理事長
7	中屋敷　蓉子	八戸 IT・テレマーケティング未来創造協議会　幹事 （リゲイン株式会社）
8	泥濘　真理子	女性チャレンジ講座第 9 期修了生 （株式会社フォリウム）
9	松橋　里実 ※	八戸商工会議所青年部　会長
10	山本　歩	八戸工業高等専門学校　准教授